

メーテルリンク論

英國の一評論家は、大陸の作家中メーテルリンクとトルストイとイブセンの三人を、最も多くイギリスの讀者に喜ばれるものとして擧げてゐる。そして此等の作家はみな道學者であるがためにイギリス人に喜ばれるのであると説明してゐる。此等の作家はたしかに道學者である。道徳家である。其の貴い所以もそこにある。

イブセン、トルストイ、メーテルリンク等の如くであつてこそ、初めて眞の意味の道學者であり、道徳家である。私がこゝで言はうとするのも、此の道學者たるメーテルリンクの一面である。

道學者とは人生を説く人といふことでなくてはならない。近世の藝術は、藝術そのまゝが人生である。人生の中でも、特に精神争闘の一面が結晶して現代の大なる藝術を成すのである。現代の人の複雑を極めた精神は、それに自覺の起るところ、必ず矛盾を感じ争闘を伴ふ。

この精神争闘の評價と結論とを考へるものが眞の道學者である。眞の道徳もそれに生きる。痛切に之れに觸れない道徳は、要するに死道徳たり、無自覺道徳たり、極樂とんぼの道徳たるに過ぎない。

けれどもまた、道徳は實行の道である、而して實行は常に斷案から生じ結論から生ずる。今日我々が懐く精神上の争闘に、現代の何人かよく斷案を下し、結論を着け得る者があらう？眞の權威を以て「我れ汝に道徳を教ふべし」と廣言し得るものは一人も無い筈である。我々は、すべて謙遜な哀れな、自己研究者たるに過ぎない。自己の精神争闘に苦しみ、疲れて血をふり絞る聲で天の一方に結論を求めてゐるものたるに過ぎない。而して此の聲を傳へるものが現代の藝術である。これだけの意味で、現代の大なる藝術はすべて道徳であり、之れが藝術家はすべて道學者である。

而して、斯うした藝術に接するとき、我々が最後に勝ち得るものは、嘆息と寛かな同情の

心である。當に藝術のみでなく、直ちに人生そのものが我々に教へるところは此の如くである。甲も乙も丙も丁も、争闘し矛盾するすべての精神は、深い人生の立場から見れば、一様に眞理であり、正義である。人生にはたゞ一つの眞理があると共に、すべての存在が眞理であり得る。すべてを容れて一つにするものでなければ、我々の生活を統一する力は無い、結論となる力は無い。而して斯やうな結論が得られないところに、嘆息と寛大自由の心が生ずる。嘆息憂愁の色調を帯びない人間は、概して淺薄な人間である。寛大自由の心を缺いて、直ちに甲の存在の上から乙の存在を非難し得るともがらは、其の自己の奥に荒涼無惻な空虚の横たはるることを感じて、恥かしくはないであらうか。

哀れな、謙遜な、眞摯な人生研究者が到達するところを之れを以て一段落とする。けれども、嘆息と寛大自由とは、要するに人生の消極的結論であつて、まだそれみづから積極的結論にはならない。人生は要するに實行であつて、實行には積極的な結論が任用である。嘆息と寛大自由とは、たゞ眞に生きんとするもの爲めに背景を與へ氣圍氣を與へるに過ぎない、さう

した気分の中に行はれる實行が最も眞實であり、正當であるといふに止まる。我々は更に此の先の結論を要求する。併しながら、古往今來、何人かよく眞に此の先の結論を與へ得たであらうか。

それに拘らず、事實に於いて我々は生きてゐる、實行しつゝ進んで行く。眞の結論なくして、たゞ眞の實行のみがある。眞の道德なくして、眞の人生のみがあるのである。言ひかへれば、結論は知るべからず、道德は知るべからずして、たゞ實行があり、人生があるのである。

我々は此の知るべからざる道德によつて支配せられて行く。道が見えないで、たゞあるいてゐたのである。斯う思ひ來ると、人生の眞理は闇である。人生の支配力は不可知である。而して、闇黒にして知るべからざる力の前には、常に恐怖があり、畏敬がある。人生の最後の道德は、此の畏敬、恐怖、闇黒、不可知の源から發するものでなくてはならない。

こゝまで來て、私はメーテルリンクに出會ふことが出来る。メーテルリンクの道德もこゝから出發する。闇黒にして恐ろしい力を彼れは

二

運命と呼んだ、運命の神祕と呼んだ。人間はいやおろなし、此の力に引きずられて行く。こゝまでは昔からある運命觀、神祕觀と同じである。取りわけ、其の運命といふものが、我々に説明することの出来ない力である點に於いて太古から今日に傳はつてゐる行詰りの人生觀である。其の五幕劇『ベレアスとメリサンド』(一八九二年)の中の少年イニョルドが、夕暮に羊飼に連れられて歸る羊の群を見て二所懸命に走つてゐる。……一生懸命に走つてゐる……大きな四辻へ來た、あゝ！あゝ！どの路へ行つていゝか知らないんだ……もう鳴きたくなつた

……待つてゐる……右へ行かうとする……行つちやいけないのだ……羊飼が土を投げてゐる……いふのが、やがて人生の姿である。又一幕劇『内部』(一八九四年)の老人が、悲しみの通る道は知れないものだといひ、人間はたゞ操り人形のやうに、何も自知しないで生きて行くといふのがそれである。運命はたゞ事實に現はれて終結した時でなければ我々に分るものでないといふ意味の言葉が、メーテルリンクの作には幾度とな

く繰り返される。要するに人生の最後の眞理であり、正義であり、道德であるところの力は、闇

黒不可知であつて、之に對するとき恐怖と畏敬との感を起す、すなはち神祕と感ずる所以である、之れを名づけて運命といふに他ならない。而して此の運命は、どちらかと言へば、恐ろしいだけに悲しい色調を多く持つてゐる。幸運といふよりも、むしろ不運の運命である。人生の最高支配力は、斯うして暗い影のついたものになる。これも昔からの運命論が、概して持つてゐる色調である。エヂボスの上に落ちて來たギリシアの宿命も『内部』一家の上に落ちて來たメーテルリンクの運命も、其の悲哀である點では同じである。

けれどもメーテルリンクは是れから先へ、更に一步を進め、二歩を進めた。彼れは稍々明かに運命の歩む途を見ようとした。そして夜明の薄あかりの中に、曠げに二筋の途を見、二通りの足音を聞いた。一つは死であり、一つは愛である。メーテルリンクの作に、早くから、或は別れ、或は合して存してゐるのは、此の二つの思想である。

メーテルリンクに取つては、死といふ事が運命の象徴であつた。何時、何處からともなく、併しながら不可抗的に、平等に我々に迫つて來るものは死である。若し運命の姿を見ようとする

るなら、死の人間を養ふ有様に最もよくそれが
見られる。この死の姿、死の歩み、死の力を
まぎく描いたものが一幕劇「入者」(一八九
〇年)同じく『七王女』(一八九一年)五幕劇「タンタ
ジュールの死」(一八九四年)等である。死の足音は
極めてひそやかである。けれども其の手が一度
かゝつたら決して放さない。死の神祕と之れに
對する恐怖とは、常に此の三作のみでなく、殆
どすべての彼れが作に現はれてゐる。

では、死は如何にして人生の最後の解決にな
るであらう? 「死即運命」の思想に従へば、我等
の實行生活は死によつて指導せられてゐなくて
はならない。生は直ちに死を最高の結論として
誓まれなくてはならない。死なんが爲に生きる
のである。此の種の思想も固より今日に始まつ
たことではない。一方から言へば、死はたしか
に一切の事を解決する。人間の生活が複雑に、
深奥に、自覺的に、なればなるほど矛盾と争闘と
が増して来る。樂天家の理想に従へば、それら
の矛盾争闘が増すと共に之れを統一し調攝す
る途も發達する譯であるが、事實はさうでない。
文明の進歩が生活の複雑を意味すると共に、精
神上の矛盾、争闘は、調和力に對して遂に増大
せられ、遂に調和そのものを破壊して了はねば

止まない、そこに近代生活の不安が生ずる。而
して此矛盾争闘を深刻に徹底せしめようとな
れば、生そのものを絶滅する外はなくなる。死
に入つて初めて一切の矛盾が解ける。人生の約
束は初めから悲劇であり、死である。古來の厭
世哲學が歸着してゐるのはこゝである。

三

併しメーテルリンクには之れと反對の一面も
あつた。人間は死と共に生といふ事實をも所有
してゐる。運命が「死せよ」と命ずる時に、我等
は「生きんと欲す」と答へる。生の力も亦た死の
力に劣らない程の強さで、我等を引きつける。
而して此の方は、メーテルリンクに於いて、愛
といふ事で象徴せられる。死と同じく不可避
的に、平等に、我々の上に迫つて来るものは愛
である。愛は、生そのものの躍動し充實せられ
る姿であるから、其の色調は喜悅であり、光
明である。「愛即運命」の思想もまたメーテルリ
ンクに認めることが出来る。

斯やうにして、メーテルリンクには、死と愛
と、二つの矛盾した運命の象徴がある。而し
て此の二つのものの關係により、彼れの思想
がおのづから前後の二期に分れる。愛と死と接

觸して相争ふ姿を書いたものは『七王女』であ
るが、併しこゝでは、王女ウルシユラは、久し
く待ちこがれてゐた王子のはるく、自分を探ね
て歸つて来た、その一瞬間前に死の手に掴まれ
て了ふ。簡単に死の勝利と愛の敗北とが描か
れてゐる。秤にかけたら、運命の重さは死の方
にある。愛はまだ運命といふ程の權威をすら持
つてゐない。けれども『ペレアスとメリサンド』
乃至同じく五幕劇「アグラヴェエーンとセリセツ
ト」(一八九六年)に至つて、愛が重大の地步を占
めて来る。言ひかへれば、愛が運命として人間
に歩み寄つて来る状態を書いてゐる。例へば
ペレアスとメリサンドとが殆ど自ら知らずし
て、一目相見た瞬間から、一生を支配するや
うな不思議な愛に陥つたのは、運命の力の發現
であつて、同時にそれが人生最上の結論を象
徴するものである。人生が愛を中心にして廻
轉する。

けれども、こゝでは、まだメーテルリンクの
道徳に重きをなしてゐるのは、ある。愛がそ
んなにして運命の力を持つに拘らず、其の愛
の先には更に他の結論が豫想せられてゐた、そ
れは即ち死である。知らず識らず愛の運命に
引きずられた我等は、それによつてたゞ一層

い死といふ運命の本座に導かれるに過ぎなかつた。従つて喜悅と光明とに充ちて居るべき愛も、其の色調は依然として悲哀であつた。メリサンドが「私は幸福です……けれど悲しい」といへば、ペレアスは「人は戀をするときよく悲しくなりす」といふ。そして結局二人は死なざるを得なかつた。アグラヴェーンとメラアンデルの愛も、セリセットの死と其の前後の憤懣悲哀で憂鬱の色に塗られてゐる。要するに眞の痛切な愛の終局には死が横たはつてゐる。此の點から見れば、最後の運命の姿は、やはり死であ

る。死は果して我等の生の最高運命であらうか？

四

メーテルリンクは知識の逞しい作家である。其の論文集『貧賤者の寶』（一八九六年）から『智慧と運命』（一八九八年）に行くに及んで、暗黒な憂愁の運命觀から一步を轉するやうな氣合を見せた。運命は必ずしも神秘的な象徴としてのみ取り扱ふべきものでない、人間の靈智によつて見ることが出来る。斯うなれば其の力は最早運命といふことすら出来ないものになる。不運は之れを避け、幸福は之れを引き寄せせることも出来

る。光明的になつて来た。

之れと相應じて、作の上に新しい光明を示したのが三幕史劇『モンナ・ヴァンナ』（一九〇二年）である。此の作は「ペレアスとメリサンド」「アグラヴェーンとセリセット」と同じ道を、更に一步先に進むと共に、死の暗い運命から回避して、新たに生の光明と喜悅とに達せんとする峠に立つものである。道かの向うに、暁の第一光を望んでゐる。女主人公ヴァンナは、愛の手によつて新人生の門を開かうとしてゐる。併しながら、其の開き得た新人生の門の奥には、果して安らかな人生の大路や殿堂があるか否かは分らない。光明と喜悅とはたゞ暗示に止まつてゐる。新人生の大道が果して愛にあるかは、問題として残つてゐるけれども、前來の諸作のやうに絶望的でなくなつた、死の運命によつて駈をつけられることが無くなつた。少くとも暗示として、問題として、光明的になつて来た。其の以上は、更に之を光明と解するも、暗黒と解するも、觀る者の自由である。メーテルリンク自身すら、此の作以後明白に人生觀を一變してゐるか否かは分らない。

メーテルリンクが、何れの作にも殆ど自分の身代りのやうにして用ひる老人がある。『内部』

の老人「ペレアスとメリサンド」のアルクエル、「モンナ・ヴァンナ」のマルコー等がそれで、人生のあらゆるものを經驗して、あらゆるものに同情し、あらゆるものを理性的眼で見、言はゞ人生の説明者、運命の先導者である。そのマルコー老人すら、「モンナ・ヴァンナ」に於いては、既に一步あとに取り残された氣味がある。ヴァンナは一步を踏み出してゐる。マルコーはたゞヴァンナを讚美して「正義はやつぱり生きることだ」といふ。新道德を生の方角に求めようとするものと云つてよい。併し我々みづからの問題はまだ其のさきに残つてゐる。（大正二年九月）

◇

懷疑がまだつこいか時代後れだとかいふものがある。滑稽ではないか。まだつこければ一足飛びに解決なり理想なりに行くがよい。我等は安値な解決理想の多きに苦んでゐる。懷疑は幾ら微細のものでもそれが眞實であり得るかが先づ疑問である。（『憂がき』）